

知的障害のある児童に対する「特別の教科 道徳」の 授業及び評価方法の実践的検討

— 児童の実態に合わせた道徳教育推進を目指して —

学籍番号 199225

氏名 松本 将孝

主指導教員 庭山 和貴

1. 本研究の背景と目的

本実践課題研究の目的は、知的障害教育における「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）の指導方法及び評価方法を検討することである。令和2年度より小学校・特別支援学校小学部で改訂学習指導要領が施行され、これまで領域の1つだった「道徳」が特別の教科として教科化されることとなり、年間35時間の指導が義務化された。特別支援学校においても、小学校に準じた目標の達成に向けて指導が求められることとなった。

これまでの道徳教育は「道徳性（心）を育成することで、道徳的实践（行動・言動）につなげていく」という横山（2015）に示された指導方法をとられていたことが多かった。しかし、知的障害のある特別支援学校小学部に在籍する児童の多くは、Piaget（1977）の思考発達段階説における感覚運動期（0～2歳）や前操作期（2～7歳）であり、またKohlberg（1971）の道徳性発達理論の3水準6段階の1段階にも該当しない。また知的障害や自閉スペクトラム症の児童は心の理論の獲得が難しいこともCohen（1985）が示している。このことから横山（2015）が示すような指導アプローチは相応しくないことが予想された。

そこで本実践研究では報告者が発達理論及び知的障害のある児童生徒の教育的対応を参考にしながら独自の仮説モデルを作成し、そのモデルに基づいた授業実践を重ねていくことで、知的障害のある児童の道徳科の授業方法並びに評価方法を検討していくこととした。

2. 実践研究Ⅰ：授業実践を通じた道徳科の授業を実施する に当たってのニーズ把握

実践研究Ⅰでは、知的障害のある児童に対して、道徳科の授業実践の過程で、学習指導を進めるに当たっての困難さ等のアセスメントを行った。倫理審査承認前であったことから、実習校勤務である報告者が実習校で活用している検査法を基に児童の実態を予測し、授業実践を通して、発問の回答内容や授業中の発言等の分析を通してニーズを把握することとした。授業では「思いやり」に関する読み物教材を活用して、登場人物の心情理解及び心情の推測、他者の視点に立って物事を考えることができるか等について把握した。

その結果、言語理解力が4～6歳程度の児童には言語活動や心情理解等を含んだ道徳科の指導が行いやすいことが示唆された。ただし、児童の実態を踏まえて適切な視覚的・言語的なプロンプトを授業に適宜入れることで、道徳性の伸長につながるのではないかと考えた。

3. 実践研究Ⅱ：ニーズを踏まえた道徳科の授業実践の工夫と評価方法の検討

実践研究Ⅱでは知的障害のある児童に対して、困難さや日常行動のアセスメントを行い、それに基づいた道徳科の授業実践を通して、指導方法及び評価方法の検討を行った。これと並行して、児童の道徳性の向上と行動改善を目指した。実践研究Ⅱの期間は、新型コロナウイルス感染症による休校期間明けであったことから、「清潔」に関わる道徳性（「節度、節制」）について取り扱った授業実践を行った。授業前に清潔に関わる行動の1つである「手洗い」について、行動を分解しそれぞれの項目がどの程度できているかの分析を行った。次に検査法による全般的な発達水準、社会性、言語理解力等のアセスメントを行い、これらの結果を踏まえて授業立案を行った。指導方法として、授業の中で「道徳性」と「道徳的実践」を往還することによって、両者の伸長を目指すこととした。授業の最初の段階では実態に合わせたプロンプトを入れたが、授業中における行動や言動の記録を取りながら、回を重ねるにつれてプロンプトを除去していくこととした。

結果として、児童は生活に結び付けて清潔の大切さ（自分だけではなく、他者をも守る）ということに気付き、さらに手洗いについてもより丁寧に洗うことができるようになった。授業の中では、児童間や児童－教師間の相互作用を適切に働かせるためのプロンプト提示によって、児童がより指導目標の到達に近づいたと推測される。

4. 実践研究Ⅲ：児童の道徳性及び道徳的実践に関する効果測定－2年間の授業を踏まえた成果－

実践研究Ⅲでは、実践研究Ⅰ及びⅡを踏まえて児童の道徳性及び道徳的実践力がどのように変容が見られたかの検証を行った。実践研究Ⅰの授業手法をできる限り踏襲し、同じような状況で授業を実施し、発問への回答や授業での発言等について記録を行った。テーマは実践研究Ⅰと同様の「思いやり」を取り上げ、教材は変更したうえで登場人物の理解、他者視点からの心情理解等についての発問を行った。

実践研究Ⅰ～Ⅲで継続して研究対象となった児童3名については、読み物教材の状況の理解をして、つたない言葉でありながらも発問への回答を行っていた。さらにその回答は者の心情を踏まえた上でどのように行動すれば良いのか自分なりの回答ができていたことから、実践研究Ⅰ～Ⅲを踏まえて道徳性や道徳的実践に伸長が見られたと考えた。

5. 総合考察

実践研究Ⅰ～Ⅲを踏まえて、知的障害教育における「特別の教科 道徳」の指導及び評価方法への考察を行った。田沼（2015）は「道徳科においても資質・能力を育てることという点では他教科の指導方法とは違うものではない」と主張している。そのことから知的障害のある児童に対する道徳科の指導において的確なアセスメント、それに基づく指導計画の立案、自分ごととして考えられるような体験活動を取り入れた授業、授業における支援内容の調整、評価、授業改善の一連のサイクルを循環させることによって、道徳性の身長や行動改善を目指すことが示唆された。